

【1月 睦月(むつき)】

1年の始まりの月。年の始まりに睦^{むつ}み合う(親しくする)月であることから睦月というようになったように、この月、様々な場所で「本年もどうぞよろしくお願いたします」という挨拶が交わされます。また、仕事の手を休め、親族とゆっくり過ごすことから、お正月ならではの、みんなで楽しめる遊びが昔から多く親しまれてきました。

<1月の行事>

1日	元日
7日	人日 ^{じんじつ} の節句(七草がゆ)
10日ごろ	成人の日
15日	どんど焼き

元旦

元旦は、年の最初の 1 日。「年のはじめを祝う」国民の祝日です。戦前、この日は「四方拝^{しほうはい}」と呼ばれ、宮中での新年行事のひとつでした。

四方拝は平安時代に始まった天皇の儀式で、元旦の早朝、天皇が正装し、皇居にある神嘉殿^{しんかでん}の南庭^{なんてい}で天地四方の神々を拝み、災いを払い、人々の幸福と健康、豊作を祈りました。

戦前もこの日は休日とされ、紀元節、天長節、明治節と並んで四大節(祝祭日)のひとつに数えられていました。



元旦

「元旦」は「元旦の朝」(初日の出)。「旦」という字は、地平線や水平線から太陽がのぼってくる様子をあらわしています。

「初空^{はつぞら}」「初御空^{はつみそら}」という季語があります。これは、元旦の空のこと。すがすがしい気持ちで見上げる空は、何ものにも代え難いおめでたいものです。晴れ渡った空も、雨も雪も豊穰の良い前兆として、喜ばれてきました。

「一年の計は元旦にあり」と言われます。その年の計画は元旦に立てるべき、ひいては、何事もはじめに計画を立てることが肝心という意味です。初日の出を拜んだ後は、その年の計画を立て、一年の良いスタートを切りましょう！

元旦の行事

初日の出

初詣(1月1日・2日・3日の正月三が日)

年賀状の配達

お年玉

御節料理

餅(雑煮・鏡餅・餅まき)

どんど焼き(左義長)

1月14日あるいは15日を中心に行われる小正月の火祭りです。正月に各家で飾った松飾りや、前年のお札などを集めて焼きます。厄年の人や子どもが中心となって行われることが多い行事です。

小正月に行われる火祭りは全国的にみられ、その呼び名はトント、ドンド系が全国的にみられるのに対し、サギチョウ系の名は近畿・北陸・東海地方に多いです。



大磯町の左義長(大磯町 HP より)

行事・年占い

どんど焼きは村外れや河原などの村境にあたる場所で行われることが多いです。このような場所に木や竹を組み、飾りをつけた一種の柱を立て、その周りに各戸から集めた正月飾りや薪・藁などを積み上げます。柱を中心に木や竹・藁などで小屋を作り、数日前から子どもたちがそこで集団生活をしてきた例もありました。この小屋は一般に正月小屋と呼ばれています。この正月小屋は、柱と一緒に焼かれる場合も少なくありません。

どんど焼きの柱は、村内の小区分ごとに数基作られることもあり、その燃え方を競い、また、燃え方で幸運を占う一種の年占になっている場合があります。火が燃え上がると大声で囃し立て、青竹が景気よく破裂する音は喜ばしいと感じられています。

この火にあたる、あるいは、この火で焼かれた餅や団子を食べると1年中病気にかからないとも言われています。また、書き初めを火にくべて高く舞い上がると習字が上達するとか、どんど焼きの灰を持ち帰り家の周囲にまくと、災い除けや虫除けになるとも言われます。

目一つ小僧とセエノカミサン

大磯の左義長はセエノカミサン(道祖神)の火祭りで、セエトバレエ、ドンドヤキとも呼ばれており、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

<言い伝え>

閻魔大王の使いの目一つ小僧と呼ばれる厄神が、村人の行いやそれに対する災いを帳面に書いて回っていました。ある時、夜が明けてしまい、太陽に弱い目一つ小僧は慌てて帳面をセエノカミサン(道祖神)に預けて帰って行きました。セエノカミサンは困り果て、自分の家とともに帳面を燃やし、村人を災いから守ったとされています。

これがセエトバレエ(左義長)の始まりと言われています。